

009

九条ねぎの台風被害を教訓とした、防災指針書（台風対策）の策定と実施

取組主体

こと京都株式会社

従業員数

187人

想定災害

台風等

実施地域

京都府

- 過去の台風による被害をもとに、台風の上陸予定時刻から逆算し、従業員の安全を確保しながら一斉収穫、保管等を行う台風対策プランを策定。全社一丸となって経営への影響を最小限に抑えるBCP対応を実施。

1 取組の特徴（はじめたきっかけ、狙い、効果、工夫した点、苦労した点）

全社全部門における台風対策プランの策定・実施

- 京都の伝統野菜である九条ねぎに特化し、種蒔きから生産、自社工場での加工、商品の全国販売を実施する生産法人である「こと京都株式会社」は、過去の九条ねぎの台風被害を教訓とし、台風対策を中心とした防災指針書を策定した。九条ねぎの伝統を守り継承することはもちろん、異常気象等によるあらゆる災害に対応できる「こと京都モデル」を構築し、自社のBCP強化を実施した。
- 平成29年と30年に連続して台風による大きな被害を受けた際には、一晩で約200tものねぎが倒伏し、45日間にわたりスーパー各社への出荷を休止した。創業以来初の大規模な出荷停止となり、工場も1ヶ月間休業するなど、経営面で甚大な影響が出る苦い経験となった。主力品目である九条ねぎは全て露地栽培であることから、天候リスクを一律に受けるため、経営を維持し事業を継続する上で、台風といかに対峙するかが大きな課題となっていた。
- 従来の台風対策は、農業部門における活動の一貫であり、一部門単独で行われる一過性の対応としての側面が強かった。しかし、短期的には回復し得ないダメージを残すことが多く、台風による経営への影響を無力化することが、そのまま安定した経営に直結するため、部門横断で台風対策を講じる必要性が生じてきた。
- そこで同社は、令和2年より毎年防災指針書を策定し、経営政策の柱として、全社が有機的に結合し、刻々と変わる状況に対して敏感に反応することで、自然災害の影響を最小限に留めることを目指している。特に、8～10月を「台風対策期間」と定め、ねぎ・顧客・生活を守る取組として、各部門で非常時の対応を明確化した。農産部門では、台風が上陸し、ねぎが倒伏する前の一斉収穫を根底に対策を行い、収穫農地の優先順位を決め、前倒しでの収穫や葉先の刈り込みを実施する。工場部門では保管冷蔵庫の容量確保を、営業部門では出荷予測や顧客への連絡等を徹底する。期間中、オリジナルロゴ「NEVER GIVE UP!」のコンテンツを社内に設置し、全社一丸となってBCP（事業継続計画）の達成を目指している。



台風被害による倒伏した畑



オリジナルロゴ「NEVER GIVE UP!」

国土強靱化

台風発生～通過までの対応プログラム

D(基準日)		-7	-6	-5	-4	-3	台風の状況 -2	強風域接近 -1	接近・暴風圏P 0	通過後 1	想定 台風強度
プラン1	農産				台風発生	集中収穫①	集中収穫②	集中収穫③ 亀岡へ 全量直納	休み	状況調査	<div style="text-align: center;"> </div>
	向島工場				対策本部設置	調整ため込み	藤枝へ出荷	横大路へ出荷	最小限出勤	最小限出勤	
プラン2	農産			台風発生	集中収穫①	集中収穫②	集中収穫③	集中収穫④ 亀岡へ 全量直納	休み	状況調査	
	向島工場			対策本部設置	調整ため込み	藤枝へ出荷	藤枝へ出荷	横大路へ出荷	最小限出勤	最小限出勤	
プラン3	農産		台風発生	集中収穫①	集中収穫②	集中収穫③	集中収穫④ 亀岡へ 全量直納	タフバンド 設置	休み	状況調査	
	向島工場		対策本部設置	調整ため込み	藤枝へ出荷	藤枝へ出荷	藤枝へ出荷	横大路へ出荷	最小限出勤	最小限出勤	
プラン4	農産	台風発生	集中収穫①	集中収穫②	集中収穫③	集中収穫④ 亀岡へ 全量直納	集中収穫⑤ 亀岡へ 全量直納	タフバンド 設置	休み	状況調査	
	向島工場	対策本部設置	調整ため込み	藤枝へ出荷	藤枝へ出荷	藤枝へ出荷	横大路へ出荷	横大路へ出荷	最小限出勤	最小限出勤	

台風対策プラン一例

2 取組の平時における利活用の状況や防災・減災以外の効果

- 過去に起こした出荷ストップの事例を受けて改善策を講じていることを取引先にも伝えることにより、取引先との信頼関係が大きく向上した。さらに、農業界の BCP 対応として事例報告を行い、BCP の浸透を図ることで、自身の経営を自身で守ることの重要性を伝えている。

3 現状の課題・今後の展開等

- 台風の発生から到着までの時間は台風の到来時期や状況によって変わるため、人員の確保及び労働時間の延長が課題である。加えて、収穫時の状況（雨による高温、多湿等）や冷蔵温度等の諸条件により、収穫したねぎの品質の劣化速度が都度変わるため、それに応じた対策を順次行うことが必要である。
- 今後、経営規模が拡大すると、収穫するねぎの量が増え、保管する冷蔵庫等の確保も必要になると考えている。そこで、運送業者と提携し、保冷 10t トラックを台風時の臨時保冷库として確保するなどの対策を講じている。

4 周囲の声

- 供給量に対する不安が減り、安心して販売ができる。また、葉物全体の供給量が急激に減少したタイミングで安心して販売できる商品として提案してもらえたことはありがたかった。（食品スーパーのバイヤー）

担当者の声

- 地震、台風、疫病と、昨今はあらゆる災害に直面しており、いつ何時何が起こるか分からないのが現状です。特に台風は、毎年必ず来ます。また、今はどこに来てもおかしくない状態なので、今までは被害に遭わなかった地域でもまさかのために準備する必要があります。
- 2～3人の事業体では、社長が指示して有事を逃れることはできるのですが、人数が多くなると、有事に誰が何を対応するかを決めておかないと、被害を最小限に抑えることはできません。地形や環境を考えて対応する準備が必要です。
- 取り組んでよかったことは、被害を少しでも抑えることができることですが、一番は、社内の人材育成に大変役立つことだと考えています。毎年、訓練を行い、取組をブラッシュアップすることで、より良い災害対策を行っていきたいと思います。

問合せ先

こと京都株式会社 法人番号：2130001028257
 電話番号：075-601-0668 FAX：075-601-0662 E-Mail：web@kotokyo.co.jp

サイト URL

